慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Paul de Lagardeの政治哲学
Sub Title	The political philosophy of Paul de Lagarde
Author	多田, 真鋤(Tada, Masuki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1970
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.43, No.10 (1970. 10) ,p.79- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	潮田江次先生追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19701015-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Paul de Lagarde の政治哲学

多田真鋤

はしがき
一　ラガルドの歴史観
二　ラガルドの社会観
三　ラガルドの宗教観
四　ラガルドの民族宗教観
むすび

はしがき

かつてナチス・ドイツの理念形成に参与し、「二〇世紀の神話」の著者として著名なアルフレート・ローゼンベルグは、その著「理念の形成」(Gestaltung der Idee) において、ニーチェ、リヒャルト・ワグナー、ヒューストン・スチュアート・チェンバレンらとともに、ゲッチンゲン大学の東洋語教授であつたポール・ド・ラガルド(Paul de Lagarde, 1827-1891) をナチズムの真の思想的先駆者として称賛し、またローゼンベルグ自身の思想形成においても、チェンバレンとともにラガルドに

負うところ大であるとしてしばしば謝意を表している。[1] すなわち、ローゼンベルグによれば、カトリックとユダヤ人、普通選挙権と啓蒙思想に対する嫌悪の感情をラガルドと分ちあつており、ドイツの言語と文化からセム族的、ローマ人的要素の払拭を要求する主張においてラガルドの思想に一致しているという。さらには、ラガルドの「中央ヨーロッパ圏」の構想から、ローゼンベルグのユダヤ人追放の着想も生じたものとしてラガルドへの思慕の念を著述の随処において縷々述べている。「近代の超克」を唱え、新理想主義政治哲学の潮流に棹差しながら展開したナチズム運動の精神的支柱が、一九世紀ドイツの後期ローマン主義思想に依拠するところ大であることはここに論ずるまでもない。

ナチス運動の理論的指導者を以て自ら任じ、党の主たる機関誌「Völkischer Beobachter」の主幹としてナチズム思想の形成とその実践を具体的に実施したローゼンベルグが、自らその師表として仰いだポール・ド・ラガルドの政治哲学の一端を解明し、ナチズム精神史の一角に位置づけようと試みるのが本稿の狙いである。

ラガルドは一八五三年に自らを急進的保守主義者と命名し、[2] 前期ローマン主義や保守主義の思想的混乱を整序しながらローマン主義的保守主義の在り方を鮮明に表明しようと試みた。[3] ラガルドの生涯とその精神形成、あるいはラガルド以後のドイツ保守主義の展開に関しては、後日稿を改めて考究しようと考えているが、この稿においては彼の政治哲学の骨子をとり扱つてみたいと思う。

彼の思想活動はほぼ一八五〇年代のプロシヤの政治状況を背景として開始せられている。すなわち、当時のプロシヤにおけるユンカー支配の統治構造に対して批判を行い、反体制の急進的思想家として自らの存在を明瞭にし、一八五四年には「大ドイツ中欧帝国」の構想のもとに、分邦的、多元的ドイツの統合を意図している。ビスマルクのいわゆる第二帝国の発展とともに、それに随伴したもろもろの社会的矛盾や政治的混乱、文化状況の低迷を憂慮しながらその独特な時代批判を展開している。[4] 一八九〇年以降は新理想主義哲学の発展とともに次第に思想界の寵児となつてゆくのであるが、ここでは第一

次世界大戦当時に広く読者層を獲得した彼の著「ドイツ論集」(Deutsche Schriften) を中心にその政治哲学の一端に照明を与えてみたい。

(1) Alfred Rosenberg, Gestaltung der Idee, Vol. I, 3rd ed. Munich, 1936. pp. 15-19.
ローゼンベルグは、主著「二〇世紀の神話」(Der Mythus des 20. Jahrhunderts.) において、「ポール・ド・ラガルドはマイスター・エックハルトの後にあつて恐らくドイツの永遠の夢を語つた最初の思想家であろう。しかもかつての偉大な思想家エックハルトをいまだ束縛していた拘束から脱却していた。幾千年前、ドイツの騎士を動かし、誤りと罪を犯しつつも高嶺に登ることを得せしめたもの、それがラガルドにおいて、はじめて明白な意識として現われたのである。今日、ドイツ民族はラガルドの夢を再び夢見はじめている」といつている。

(2) Paul de Lagarde, Konservativ?. in Deutsche Schriften, s. 5.

(3) Robert W. Lougee, Paul de Lagarde, 1962. 拙稿「近代ドイツにおけるロマン的保守主義」法学研究第四一巻第五号所収参照。

(4) Hans Kohn, The Mind of Germany, 1961. pp. 270～275. Klemens von Klemperer, Konservative Bewegungen zwischen Kaiserreich und National Sozialismus, 1957. ss. 52-53.

一　ラガルドの歴史観

ラガルドの主著「Deutsche Schriften」は、ほぼ一八五三年から八五年にかけて書かれた十六編の政治論説によつて構成されており、一八八六年にゲッチンゲンで彼自ら一書にまとめて公刊したものである。そのうち若干の論題を掲げてみるならば、一八五三年には「保守主義とは？」(Konservativ?) と「ドイツ政治の現代的課題について」(Über die gegenwärtigen Aufgaben der deutschen Politik)の二編が書かれ、一八七三年には「ドイツ国家の神学、教会、宗教に対する関係について」(Über das Verhaltnis des deutschen Staates zu Theologie, Kirche und Religion)、一八七五年には「ドイツ帝国の現代的状況について」(Über die gegenwärtige Lage des Deutschen Reichs)、一八八四年には「プロシヤにおける保守党の綱領」(Programm fur die konservative Partei Preußens) というような課題で計十六編の論説が収録されている。彼の政治哲学がいわゆる哲学

体系を具備したものではないことは、この著書を概観しただけでも明らかである。むしろ彼は哲学的、体系的思考を忌避することに自己の特徴を顕示していたといえよう。同時代の新カント学派の哲学者パウル・ナトルプ（Paul Natorp）が、彼の著述を読んだ後にある種の哲学的疑問をラガルドに対して提起したのであつたが、彼は「私は哲学することができないばかりでなく、哲学には熱中する意志がない」と断言している。ラガルドは他の論説ではカントの哲学もその外観で斥け、カントの哲学は実体を見失つているものであるともいい、さらには教会の影響力はその詭弁（Sophie）にあるのではなく、殉教者的精神によつて効果があるものであるといつている。また彼は「一般に政治は純客観的な、抽象的な政治として存在するものではなく、その依拠する地盤は個々の具体性にある」ともいつている。[1] これらの言葉のはしばしにあらわれているようにラガルドの思考形態は、「全体像の獲得」とか「総体的印象」を把握しようとするローマン主義の思考形態である。

事物を「全体観」において認識しようとする欲求は彼にとつては良心の問題であり、信仰の問題でもあるといつてよい。この欲求は彼が東洋語学者として、精密な個別的問題に当面する場合においても決して矛盾するものでないといえる。すなわち、例えば言語のセム語系の起源やゾロアスター教の言語表現等に思いをめぐらすとき、彼は古代文化に関する自己の印象を構築し、そしてその中に神の所在を発見しようとしたといえよう。彼が極力排斥したのは啓蒙主義的、合理主義的思考にみられるように、その要素の中においてそれを冷静に分析することによつて何らかの理解に接近してゆこうとする方法的態度であつた。彼は事物の本質に近づくために「本能」にかなり依存している。彼は次のようにいつている。「私は自分の本能を信頼している。ほかに何か役立つものがありましようか？　雪催いの重々しい大気、高山の清澄な空気、静寂な森林、大地の香り、これらすべてのものが私の中に、本能による力強い知覚を喚起したのです」といつている。[2] 彼の世界観の根底にあるものは歴史哲学である。その基本的観念は、絶えず発展しつづけている神の意志によつて世界の秩序は規定されているとの信念に発している。歴史は神の衝動と啓示によつて規定されているが故に、そこには偶然性は存在しない。各時代に

とつて神の意志は、最善のもの、最高のもの、最も価値のあるものを表示する。ラガルドによれば、いかなる時代の歴史的内容も、神の意志を誤認しない限り、過去に存在していたもののすべてに関連しているものである。ラガルドによつて表現されたような神の意志の表明は、ヘーゲルにおける絶対精神の自己実現の思想とは類似のものではない。彼は、歴史のうちにいかなる論理的過程をも見出さず、歴史をある段階が次の段階を支えているという意味で累積的なものとみなしている。神の意志は推論されるべきはずのものではなく、神はそれを予言者を通して、福音書を通して表示するのであるという。「神は歴史を通して真実の啓示を未だ完了していない」のであるから、真実はいかなる教義、組織、または哲学の中にも見い出され得ない。「永遠の真理は長く、そしてその中で学び、発展する余地は広い」のであるという。(3)

「歴史的事件は神の摂理によつて支配されるし、国家のような歴史上の実在は神によつて創造されたものである。それらは偶然の産物でもなく、人為的なものではない」「人間はそのことを誤解したり、誤用したりするかもしれないが、結局、歴史を創造するのは神の摂理である」「ヒューマニティーを発展させることは歴史の任務ではない。誰でも他人のもつ独特の価値や徳性を認めると同時に、自ら独特な価値や徳性を発揮すべきである。さまざまな国家についても同様のことがいいうる。かくしてわれわれは個人的に独特な精神の調和のとれた合唱のような理想に到達することができるのである」(4)といつている。

ラガルドは、歴史の最後の産物として「調和のとれた合唱」という想像は抱いていなかつた。彼はヘーゲルの愚行は、世界史は一八三〇年のプロシヤと彼自身の哲学体系の中で最高潮に達するということを仮定できたというところにあると考えた。ラガルドは、ローマン主義者として歴史的発展の結果についてよりも、むしろ歴史過程の中に「意味」と「目的」を発見しようとした。(5) 彼は過去の時代を低評価しようとはせず、いかなる時代も完全な真実を保有していなくとも、それぞれの時代は神の計画の中において必要な時代であると認識した。すなわち、各時代のもつ使命と制度と価値は、人為的な規準に

よつては測定できないものであると信じていた。

一八五三年にパリから妻のアンナ宛に差出した書簡の中で「あらゆる世紀はそれ自体独特の使命を担つている。そして、あらゆる時代において教会はそれぞれ遂行すべき新しい仕事を担つている。歴史家は、その場所における各々の個性と舞台の価値を認めなければならない」[6]と書いている。「教義というものは、時の相関関係や宗教や歴史の事実の混合物から、各世代によつて再構成されるときにのみ活潑な生命力となる」といつているが、このような歴史主義が彼の歴史観であるといえる。

そして、このような歴史主義的歴史観は、自然法という永遠の作用の仮定に依存するような思想体系から彼を遠ざけてしまつたばかりでなく、オーソドクシイとアブソルティズムからも彼を遠ざけてしまつたものであるといえよう。ヘーゲルと同様にラガルドは、歴史の過程の中で、個性的人間に重要な役割を配分している。しかし、彼の「歴史的個性」とは名望家やナポレオン、シーザーのような人物ではない。すなわち、歴史発展の過程において、神の鼓動を感得できるような「エネルギッシュな生命力」のある人を歴史的個性として認めようとする。そのような歴史的個性を発揮できる人は、同時代の人々を歴史生活の正しい軌道に導くことのできる予言者にほかならない。しかし、予言者は常に異端者である。「歴史を前進させる人々は、必然的に破壊者であり異端者であるにちがいない。しかし、このような歴史的個性のみが時代の創造者となるのである」という。また彼は、「歴史的な深みを知らない人は正常な人物ではない」ともいう。[7]「ドイツ的生活を脆弱にし、不道徳で堕落させた要因は、外来思想を摂取したことであり、人為的なものを是認したことであり、ドイツ的精神生活と同化しえないものが存在してきたからである。ドイツ的精神生活の中で、余りにも多くのものが輸入されてきた。ギリシヤやローマの思想、旧約聖書や新約聖書の思想、ヨーロッパの他国の政治思想等々である。これらが本質的に悪いというのではないが、ただ、それらを消化し難い大きな塊りで摂取することはドイツ人の精神生活にとつては滋養にはならないとい

いうのである。形式が固定化し、時代錯誤が生じたり、歴史が沈滞化するようなところでは批判が生ずるのは当然である」[8]といつている。以上のラガルドの言葉のはしばしに表明されている思想は、いうまでもなくローマン主義の世界観であり、人間観であり、歴史観である。彼は、ヘルダーの国家に関するローマン主義的見解、フィヒテにみられる理想主義的倫理観、グリムの文学思想におけるドイツ精神への見解、ミューラーの有機体的国家観をその政治哲学形成のための素材としている。しかし、彼が建築した思想的建造物は、その時代に適合した独自なものであつたといえよう。

(1) Paul de Lagarde, Über das Verhältnis des deutschen Staates zu Theologie, Kirche und Religion in Deutsche Schriften, s. 59.
(2) Lagarde, Konservativ? a.a. O., s. 7.
(3) Anna de Lagarde, Paul de Lagarde, Erinnerungen aus seinem Leben, Leipzig 1918. s. 15.
(4) Lagarde, Über das Verhältnis, a.a. O., s. 66.
(5) Lagarde, Über die gegenwärtige Lage des Deutschen Reichs, a.a. O., s. 159.
(6) Anna de Lagarde, a.a. O., s. 28.
(7) Lagarde, Über die gegenwärtige Lage, a.a. O., s. 119.
(8) Lagarde, Über die gegenwärtige Lage, a.a. O., s. 142.

二　ラガルドの社会観

ラガルドの社会観を基礎づけている思想は、その歴史観と同様にローマン主義であり、その有機体の理念である。彼の著述において、この有機体の理念も体系的には語られず、断片的な時事論説のうちに平易に簡潔にしかし鋭く語られている。ラガルドは読者をして自然に「有機体思想」への親近感を抱かしめるようしむけているのである。

ラガルドは、体系的で社会的な有機体としての典型を中世の帝国体制に見出している。

彼の心像の中において、中世の帝国は、各階級――例えば僧侶、貴族、農民、職人等――を各々その適当な位階において位置づけていたとみる。そして、その各々は宗教的な信仰や、皇帝支配の様式によつて結合されていたにしても、各階層においてはナイーブな満足感が全体に漲つていたとみている。「このような観点で、私の保守主義は非常に復古的であるので、中世の皇帝時代への思慕としてあらわれてくる。そして、私はあの過ぎ去つた当時と現代の間に介在するすべてのものがとり除かれるように希望する」[1]と極言している。他方、彼はイギリスにおける皇帝と国民の相互の結びつき方や、責任ある機能的なアリストークラシーの存在の中に、古代ゲルマンの有機的共同体の様式を認めている。ラガルドは、ローマン主義者と同様に有機体の三つの特質を規定している。

まず第一に、有機体は生命と霊魂を保有しており、生命と有機体とは同じ概念であるとする。彼はドイツやオーストリア連邦は「能力ある生命」のために有機的であるとしばしば述べている。「私は歴史の発展のうちで、肉体のない精神も、精神を欠いた肉体も有効には活動することができないという原理の正しさを最もよく確信している」といい、他方において「活動力のない要素から成り立つている機構は、唯物的であれ、概念的であれ、恐らく霊魂や生命をもつことはできないであろう」[2]といつている。第二に、ラガルドは有機体は要素の結合ではなく、その要素が相互に依存している統合であると考えている。

有機体において、個々の要素はそれらの本質性を喪失しないし、またそれらは全体の目的に対して従属的ではないのであり、むしろ、有機体は個々の存在がその性質や目的を表現できるようにし遂行できるような手段を供給しているのであるとする。しからば、自己が全体と体系的、組織的に結合しているということを個々はどのようにして認識するかといえば、ラガルドは次のように答える。個人が共同体のもつ規制力を正しく感得するとき、言語で自己がすべての他者との一体感を感ずるとき、その時、個人は自己が鼓動する生命有機体の一部であることを知り、自己が有機的共同体において「有効な場所」

を占めていることを認識するものであるという。

さらに「プロシヤ人であるということは、プロシヤ人であるための能力、情趣を楽しむばかりではなく、それを楽しむ可能性をもつているということを知覚する能力をもつことである。有機体の中にある生命ある要素は、各構成員である個人が、自己の特性を自己が占めている場に完全に合致させているということを知覚することである」ともいう。[3] 第三に、ラガルドは有機体を歴史的発展の結果であるとする。それは人為的産物ではなく、機構（メカニズム）のように部分を集めて組成することはできない。自然発生的、歴史的所産であるから有機体の真実の姿を「国家」に認めようとする。「真に有機的な制度は、過去からの発展の所産であるばかりではなく、生き続けている過去と密接な関係を保つていなければならない。木はその幹や根を失つて生きることができないし、動物はその骨格を離れて生きることはできない」という。[4] さらに「精神的な有機体のないところには精神生活は存在せず、ただその外観があるのみである。福音書はその実現のためには緊密に結合した共同体を必要としている」といい、神への道は「各人が自己をある有機体に結合したときに存在するのであり、その自我が独特であればあるほど神への道を発見しうるのである」といつている。[5]

ラガルドはさきにも述べたように、国家が世界史の中で本質的な有機体であるということを認めている。国家とその基本的な構成員である個人との関係は彼にとつては最大の関心事であつたといえよう。ラガルドにとつて、個人は各々すべて独特の存在である。自己に対して完全に誠実であり、自己の性質をその行為や人格のうちに表明することが個人の道徳的義務である。彼は個人は神の意志の代行者であり、神の啓示の媒介者であると信じていた。

「あらゆる人は神の独特の思想である。しかし、このことは単に人類は神のイデアであるという一般的な意味ではない」といい、「個人の生活はすべての事柄の上位にある。人格に代るものは私にとつてすべて憎悪に値する。政治的に私は最もドイツ人的であり、それはとりもなおさず人々のうちで最も個性的であるということにほかならない」という。[6]

一八七〇年代のビスマルクの反動体制の中で、彼は社会における個人の卓越性を主張しつづけた。「国家のすべての構成員は、単に国家への従属的な結合以上の存在であり、またそうあるべきである。というのは、ヒューマニティー、国民性、氏族、家族、個人はピラミッドを形成する。そして、その頂上（個人）はその底辺よりも天国に近い。結果として個人はヒューマニティーよりも高位にある。

われわれはヒューマニティーと関係を絶たなければならない。そして個性がわれわれの中心問題であるということを実現しなくてはならない。個人の心の発展に直接に役立ちえない国家においてはすべてのものが偶像にすぎない」[7]といつている。個性がドイツの政治生活、文化生活の中で没落してしまつたという感慨は彼の変らざる心情であつたといえよう。普通選挙と政治的デマゴギー、大衆にアッピールするべく計算されたプロパガンダは彼の最も忌避したものであつた。彼は教育もそれが個性の実現の可能性を有するときにのみ有用であつて、「一般教育」という概念を忌避している。

このような個人観から、国家、政党、文化に対する議論を展開しているのである。

このような「個人観」はシュライエルマッヘルとフンボルトの影響とみてよい。

有機的統一体としての国家においてのみ、個人と共同体の自然的連繋が保たれるのであつて、社会契約的国家においては個性の実現も共同体の存続もありえないとするのである。生物有機体が生命の緊張を常に念頭におかなければならないように、国家は規律と秩序を保持しなければならない。彼は、秩序と共同の利益のために自ら進んで犠牲となる心情を持つていた古代ヘブライ人を賞賛している。

「何が国民を作るのか、血の純粋と遺伝子ではない。われわれドイツ人は純粋の血から成つている国民ではない。そしていかなる純粋な血も全ドイツのどこにあつても発見されるはずがない。この血の純粋とか不純とかは大した問題ではない。だれもライプニッツやレッシングを良きすぐれたドイツ人であることを疑いはしないが、彼らの名前はスラブ語である。カン

トの父はスコットランドから移住してきた。その故にわれわれはカントをドイツ人ではないと考えるべきであろうか？」[8]といつている。先にも述べたように、ラガルドは個人がその知覚と意志によつて国家有機体の構成員であることを自覚すべきことを説いているのであるが、このような精神的紐帯を除いては他のいかなる絆も国家を形成しえないとする。金権主義的な連帯や、利益指向的連帯によつては真の統合はなされえないものという。そして、ラガルドはその精神的紐帯の要として、「神の意志」の存在を強く主張する。

この神の意志が現世的に表明されたものが民族精神ということになり、国民は共通の創造的な精神、すなわち「Volksgeist」によつて活気づけられるという。ヘルダーが霊魂、精神を国家の精神的支柱として扱つたのと同様に、ラガルドは国家において民族の精神的存在の主柱を見出している。「民族の精神は貴重な植物である。そしてそれは徐々にそれ自らの性質に従つて成長する。民族精神は、国民の伝説や倫理や風俗の中に表現されてくる。それが衰微すれば国家の存在は否定されてしまう。民族精神は、国家に対して過去と現在を結びつけるばかりでなく、現在と未来を結びつけることによつて、ある種の永久性を与えている。民族精神は国家に対して将来への展望を与えている。何故なら国家は生物有機体のように発展し進歩するからである[9]」といつている。ラガルドの国家主義は、ワグナーやチェンバレンのような排外思想ではなく、彼の賞賛してやまなかつた古代ヘブライ人のプリミティブな共同体精神への憧憬から表明されたものであるといつてよい。その意味において、初期ローマン主義者のアルントやグリム兄弟の思想はラガルドに強い影響を与えているものといえよう。ドイツ的特性の尊重、土着思想の評価、民間伝承の倫理的価値の承認、このような傾向は初期ローマン主義者たちに共通の思想的傾向であったが、ラガルドはその思想をこれらの思想潮流から吸収したものである。彼はその視点に立脚しながらビスマルク帝国の欺瞞性を徹底的に衝いたのであつた。

(1) Lagarde, Konservativ?, a.a. O., s. 9.

(2) Lagarde, Konservativ?, a.a. O., s. 6.
(3) Lagarde, Konservativ?, a.a. O., s. 6.
(4) Lagarde, Über die gegenwärtige Lage, a.a. O., s. 144.
(5) Lagarde, Über die gegenwärtige Lage, a.a. O., ss. 126～144.
(6) Anna de Lagarde, a.a. O., s. 28.
(7) Lagarde, Über die gegenwärtige Lage, a.a. O., s. 141.
(8) Lagarde, Über die gegenwärtige Lage. a.a. O., s. 124. ラガルドは「血液ではなく、心情が人をドイツ人とする。これまで、ギリシャ哲学、ドイツ史、ドイツ音楽を心から研究したユダヤ人で依然としてユダヤ人たるにとどまつた者はいない」という。J・ノイロールは「穏健な反ユダヤ主義は、一九世紀のドイツ政治思想においてすでにみうけられた。フィヒテとくにアルントに反ユダヤ的な感情のあとが認められる。この傾向は当然ユダヤ人が政治的・社会的・精神的とくに経済的な生活において完全な市民権を獲得するにつれてますます強くならざるをえなかつた。……しかし一九世紀においてはユダヤ人に対する非難は、ただその特性、すなわちドイツ的あり方にとつてはしばしば異様な考え方、感じ方、行動様式にだけむけられていた。一般にまだひとびとはユダヤ人がどの程度同化してドイツ人となつたかを基準として彼らを民族共同体に受け入れる用意があつた。ラガルドにとつてさえも、まだ決定的なものは心的態度であつて、血液ではなかつた」といつている。Jean Neurohr, Der Mythos von Dritten Reich, zur Geistesgeschichte des National-Sozialismus, 1957. s. 151.
(9) Lagarde, Über die Klage, daß der deutschen Jugend der Idealismus fehle, a.a. O., s. 376.

三　ラガルドの宗教観

以上述べてきたように、ラガルドの世界観、歴史観、社会観は著しく有神論的である。彼が特に神学に関する意見を開陳する際も、社会問題、政治問題、文化問題の全般にその議論は拡大していつた。彼は自ら神学者であると称しているが、彼の神学的論説は他の政治、文化、社会のすべての論説と密着してしまつている。

古代人の思想と生活のうちに神の啓示を発見しようとする際、または現代人の神と歴史への背信を暴露する際、いろいろの分野においてその神学的論説と政治的論説は双生児であるといつても過言ではない。ラガルドは敬虔派の信徒と同様に神

の存在と威厳について極めて生々とした感覚を持つていた。彼はイザヤやダニエルが感得したのと同様に神の力を自己の心像に見出したのであつた。

「存在のあらゆる瞬間は神の意志の指揮下になければならない。およそ生命とは中心の太陽にむかつて引き寄せられるものである。

神の存在そのものが被創造物に生命を与えているのである。単なる局外者として神にひきつけられるということは神を否定することである。すべての人間の行動は、ただ一人の絶対的造物主に仕えており、仕えるべきであるということを認めることが人の基本的な義務である」[1]という。「神はわれわれの上にあり、われわれの傍らにあり、われわれの中にあることを確信し、いついかなる時でもわれわれを援助する用意のあることを確信しなければならない」ともいう。そこで神は自らの創造した自然や世界から自己の存在や本質を鋭く区別されうるのであるが、それにもかかわらず神は自然や歴史の世界において発見されるのであるといい、「神は時間と空間の中で自己を表現する」という。そして、ラガルドによれば神の意志を根元的に体現するものは民族精神ということになる。民族精神を反映しない事象においては神もまた存在せず、その故に民族精神を喪失した国家にも神は存在しないこととなる。民族精神を核とした有機的共同体を骨格としないような国家は衰退の一途を辿ることとなる。「宗教はアダムとイブから始まるのではなく、人類が歴史的、道徳的活動をなしうる共同体を形成しえたときから始まるのである。宗教は自然法というような抽象的な原理と関りあうものではなく、人間の共同社会の中に起因し発展するのである」[2]という。

国家は有機体や共同体が発展するのと同様に発展する。前者の生活能力と活力は後者のそれによつてのみなしえられる。「精神的な生活は有機体の中でのみ発展する。各構成員が忠誠であるという点で他のものと結びついているように、人々が共同の義務の負担を受け入れ、善を擁護し、悪と戦い、罪業を善行に変えうるような共同社会は繁栄する。このような共同

社会を内包する国家はすべての発展の極致である」[3]ともいう。シュライエルマッヘルやドイツの神秘主義者らと同様にラガルドは宗教体験を強調する。キリスト教に対する彼の批判の主なる点は、キリスト教があまりにも観念に依存しているということである。

「キリスト教の宗教的概念は間違つている。宗教は常に概念や思想のようなものではなく、神と信徒との直接的関係であり、神との一体の生活感情を認めてゆく態度である。宗教はその音楽を聞いてバッハを学び、生まれてただちにそれを聞いて母国語を学ぶのと同様に体験からのみ得られるものである」[4]という。ラガルドはその著述のいたるところにおいて信仰の問題を提起している。そして彼における信仰の問題は祖国の再建の問題と深く内面において一体化されていた。一八七〇年代のビスマルク政治体制下における精神生活の荒廃の状況、とくに青年層における理想主義精神の欠如をラガルドは極力批判したのであり、その状況の克服のために信仰の問題を強調したのであつたといえよう。「われわれは人工的なものと策略の中で疲れている。われわれは復活すべきである」と述べている。

ラガルドの神学は、神の国が歴史の中で、また歴史を通して発展し、現世の国家のうちにその姿を正しく現わしているか否かを把握することにあつたといつてよい。彼はウィルヘルム一世宛に「私がここ三十年間以上も追求してきた神学は、歴史科学の一部門であつた」と書いている。そして「この神学こそ科学の女王であり、人間のなしうる最高のことと、この最高の能力をもつ人々に関係しているところのものである。またそれはその原理がケプラーやニュートンの原理と同様に正確にそして強い興味をそそるものとして示されうる精密科学でもある」[5]ともいつている。ラガルドは宗教の歴史に対する当時の熱狂的な関心を純粋な神学にまで高めたいとの願望を抱いていたのである。その論説「Über das Verhältnis des deutschen Staates zu Theologie, Kirche und Religion, 1873」を、彼の神学研究の中心課題として提起し当時の正統派神学に対する批判と、ビスマルク帝国の政治批判を同時に実施したのであるといえよう。神学を研究する者が「教義の偏見」のもとにいる

間はその仕事を開始することはできないし、もし神学がそれから脱却してその高い使命を遂行することができるならば、国家は道徳的水準を保ち、学問に必要な範囲の自由を用意することによつて、知的な精神活動に貢献しうるものであることを説いたのである。すなわち、彼は「国家と宗教」という政治哲学上の課題に正面からたちむかつたともいえるのである。ラガルドは古代ヘブライ人の歴史哲学の研究と、彼らの宗教意識を探究することによつて、この課題に対する一つの解答を得られるものと考えたのである。古代ヘブライ人の宗教意識はその当初において個人の信心や信仰に基づいてはいなかつたとみている。すなわちそれは、共同生活に対する自己献身や犠牲の精神というような共同体的意識から起つたとみる。

神権のもとで国民であろうとする彼らの意志、彼らの逆境からの救済の信仰はこれらの状況のもとでのみ歴史的表現を見出すような純粋な精神を彼らの中に定着せしめたと考えるのである。約束の地への到達は外部の力ではなく、ヘブライ人の神聖な共同の目的という天賦の心情によつて達成されたとみるのである。ラガルドは、神の使命と国民の進化という重要な内面的意味において、古代ヘブライ人の中に歴史と宗教に対する解明の端緒を発見したのである。(6)「予言者たちは民族精神とイスラエルに対する本能を持つていた。彼らの中では祖国に対する愛の炎が最も純粋に燃えていた。そしてその愛は伝統的な形式ではなくして、予言者たちが重大な使命の担い手であることを証明した強烈な経験であつた」(7)といつている。ラガルドは彼のインスピレーションの多くのものを古代イスラエルの予言者たちの中に見出したのである。しかし、時の流れとともに予言者たちはもはや神と国家に対する古い感情をそのままに保持しえなくなつたので、ユダヤ主義の宗教が発生した。

そしてこの宗教は古代のナイーブな敬神の心を奪つてしまつたのであるとする。

ラガルドにとつては古代ヘブライ人の原初的宗教体験は一つの教訓であり、この教訓を当時のドイツの精神界において再生させる使命を感じていたといえる。

(1) Lagarde, Programm für die konservative Partei Preußens, a.a. O., s. 364.
(2) Lagarde, Die Religion der Zukunft, a.a. O., ss. 218-219.
(3) Lagarde, Über die gegenwärtige Lage, a.a. O., s. 145., Über das Verhältnis, a.a. O., ss. 74-75.
(4) Lagarde, Über das Verhältnis, a.a. O., s. 73.
(5) Lagarde, Über das Verhältnis, a.a. O., s. 58.
(6) Lagarde, Die Religion der Zukunft, a.a. O., s. 222 ff.
(7) Lagarde, Die Religion der Zukunft, a.a. O., s. 224.

四　ラガルドの民族宗教観

ラガルドにおけるモラリズムは倫理観念よりもむしろ民族精神という感覚のうちに存在し、この意味でのモラリズムを実践しようとしたものといえる。ラガルドは民族精神を観念化することはできないが、感得しうる内在的道徳秩序として把握しようとした。例えば、彼によれば、単に講堂において、講義のみによつての教師と学生の接触は、「民族精神」を伴わない教育方式であり、そこに真の教育は存しないという。そのような教育はいわゆる研究者を作ることはできるとしても共同体の要求や自己の心の必要性を充足しうる人間を形成することはできないという。彼は良心とは民族精神の解説者の役割であるといい、それは個人を通して働くのであるが、その基礎は共同体の道徳的態度にあるという。

「良心は歴史的に進化した状態に基づき、時代の精神のもとに在る」のであるから、「一六世紀のドイツの良心は当時の特権階級に対抗し、ビスマルクのドイツにおける良心は人工的になつてしまつた国家に対抗するものである。共同体が有機的に形成されていないときは良心も衰退してしまう。道徳的世界においてはわれわれは附随的に関連し合つているのではなく、有機体の構成員として関連しているのである。もし共同体が組織的な有機体を欠いているならば、それは民族の精神の要求に敏感な良心をもつことはできないであろう」[1]といつている。ラガルドは、民族精神の存在を示すためにいくつかの語

句を使用しているが、そのうちで頻繁に使用したのは、「Ursprünglichkeit」、「Wahrhaftigkeit」、「Geist」等の語句である。ラガルドは、ドイツ人が「絶対的な源泉、すなわち起源」に対する感覚をもつことができたし、またもつたということを確信している。彼はドイツ人の偉大な価値は、彼らが「原初的民族」であつたということをしばしば述べている。このことは、ドイツ民族が時間的に古い人種であつて、原初的な文化様式をもちえたという意味ではなく、国家形成の基本的な精神的衝動と常に密着していたという意味で唱えているのである。

そして、この「Ursprünglichkeit」の「精神性」を見失つている状態をビスマルク時代のドイツに見出そうとしたのであつた。

「Wahrhaftigkeit」という言葉をラガルドは単なる誠実という語意で使用してはいない。彼によれば「自分自身の国家が、自己にとつて真実であること」という意味において使用している。この意味で「Wahrhaftigkeit」とは政治価値として最大なものとなる。

ドイツ民族の本来の「Wahrhaftigkeit」の出現が、ビスマルクの帝国によつて阻害されているという感慨がラガルドの著述においてしばしば表明せられている。その意味で、彼のいう「Ursprünglichkeit」の観念と、「Wahrhaftigkeit」の観念とはその根底において一致しているのである。(2)

「Geist」とは、ラガルドによれば世界における生きている要因である。彼は「Geist」という語句を、形而上学的な、絶対的なものとして扱わず、精神的態度という意味あいにおいて使用している。「宗教は人間が『精神』の水準に到達するまでは考えられない。政治生活の真実の在り方は精神的闘争の生活様式において発現する。『精神』は人物の魅力、彼らの活動力、そして歴史の担い手としての地位を決定する要素である」(3)という。そのほか民族精神を強調する文章のなかでラガルドは「Innerlichkeit」、「Freiheit」、「Pflicht」というような語句を繰り返し述べている。

彼自らしばしば「未来の宗教」と呼称していた彼の民族宗教の観念は、その社会観、歴史観から構想されてきている。彼の時代批判と実践哲学は一種の宗教的使命感によつて支えられていたので、広範囲の社会問題に対してその鋭鋒はむけられたのであつた。彼における中心課題は次の諸点にあつた。すなわち、第一は「神は国家の歴史のうちに自己とその意志を具現する」。第二は「神の最高の創造と関心は個人である」。第三に「個人は国家の原初的共同体においてのみその可能性を発展させることができる」。第四に「神の王国は、国家共同体が完全なものとなり、人々が神が過去にどのように彼らの国家に話しかけたかを理解し、現在において神の言葉の真実の意味を理解しえたときに実現されるであろう」。第五に、「新しい歴史学的神学は国民の歩むべき方向を指示するであろう」というのである。

ラガルドは、カソリックとプロテスタントの両方の神学の基本的要素を拒絶はしたが、しかし、キリスト教の伝統的精神から乖離したのではなかつた。彼は民族のいかなる神をも信じているとは告白していない。ただ彼は神の存在をアブラハムやモーゼや福音書の時代に見出したのである。彼は神が一九世紀のドイツにも同様に近づいていると信じたのである。彼のいう「歴史学的神学」の目的は、一九世紀のドイツの思想界にこの事実を理解させ、神の言葉をうけ入れるように準備させることであつた。

ラガルドによれば、キリスト教は個人の霊魂の救済に主たる目標があるのであつて、いかなる特定の人々や社会階級に対しても特別の約束を行なつているわけではない。教会は個人の救済のための媒介体であつて本来それ自体が目的ではない。しかし、ラガルドは国家の有機的共同体においては個人は自己の精神的な性質を具現できるし、また自己を救済しうる不可欠の存在であるとしている。

ラガルドがキリスト教徒に対して共感を覚えたのはその実践活動においてであつた。

彼の宗教思想は神秘的な色彩が強いのであるが、決してそれは瞑想的なものではなく、実践的、行動的でありラディカル

な意識を伴つたものであつた。「未来の宗教」(Die Religion der Zukunft, 1878) の冒頭に、「人間は恐れや約束や信仰によつてではなく、善への実践的行動において神に近づくことが可能なのである。敬虔であることは自己の人生と歴史が一体であることを理解することである。信仰心の篤い人とは行動的な人である」といつている。ラガルドは自らを急進的 (radikal) と呼称することに満足していた。「私は急進的であることができないほど保守的ではない」といい、「私以外に急進的保守主義者はいない」ともいつている。一八七五年にはカーライルにあてて、「われわれ二人は未来への共謀者である」と書き送つている。

彼がビスマルクの国家体制に対して加えた攻撃は、自然や神の力で規制された民族共同体の完全な実現をビスマルク体制が阻害しているという理由からであつた。彼の批判の対象になつたのはビスマルクの帝国体制であり、資本主義であり、大学制度であり、教育理念であつた。そして、その時代批判を通じて神の意志の真の具現体であるべき民族共同体の出現に期待をかけたのであつた。その意味において彼はローマン主義的、急進的保守主義者であつたといえよう。

(1) Lagarde, Über das Verhältnis, a.a. O., s. 40., Über die gegenwärtige Lage, a.a. O., s. 116.
(2) Lagarde, Konservativ?, a.a. O., s. 15. Die Religion der Zukunft, a.a. O., s. 247
(3) Lagarde, Zum Unterrichtsgesetz, a.a. O., s. 188.

むすび

ナチズムの理論形成を担当し、血と人種の神話を極端に推進したローゼンベルグが、ナチズムの有力な思想的先駆者としてラガルドを位置づけたことはすでに「はしがき」において述べたところである。ラガルドが後期ローマン主義者として活発に啓蒙主義の克服を唱え、その有機体思想と歴史主義的史観を以て一九世紀後半のドイツの精神状況を批判し、来るべき未来国家のあるべき姿を示唆したことはすでに本論において述べてきた通りである。一面において彼の歴史観、社会観、宗

教観、並びにその未来国家観はナチズムを育成するための好個の揺籠であり跳躍台であつたとみなすことも可能であろう。ナチス革命が保守革命といわれ、ナチス道徳の系譜学（Genealogie der Nazi-Moral）において彼が位置づけられる運命にあつたことは、彼の政治哲学の担つた宿命であつたともいえるのである。ラガルドが一九世紀後半のドイツの政治、社会、精神状況を対象として、「今日の国家は世襲的階級であり、政治は茶番劇であり、与論は臆病な娼婦である」といい、「ドイツが生活力をもつていないことは現在では誰の眼にも明らかである」と批判したのは、あくまでもビスマルクのドイツ帝国における外来文明の横溢と、都会化・工業化現象、似而非議会主義および実体を欠いた倒錯した教育体系にむけられたものであつた。(1)

さらにまた「キリスト教という宗教概念は虚偽である。宗教は神に対する個人的関係である。宗教は絶対的現在である」といい、「いかなる民族にも民族的宗教が必要であるということは次のことを考慮すれば判る。すなわち、民族は肉体的な生殖によつて成立するのではなく、歴史的事件によつて成立する。しかし、神の意志と支配に従うものである。それ故、民族は神によつて創造されるものである」というとき、さらに「カソリック、プロテスタント、ユダヤ教、自然宗教は新らしい世界観の前に敗走し、それらは朝日が山頂に昇るやランプがもはやかえりみられないように、かえりみられなくならねばならない。そうでなければドイツの統一性は日一日と危くなつてくる」と強調したことは、彼独自の宗教哲学――彼によれば歴史学的神学――から発せられた時代批判であつたのである。

しかし、ローゼンベルグを始めとしてナチズムの主唱者たちはこのラガルドの思想を自己の主張のために有利に援用してしまつた。

ノイロールも「ニーチェもゴビノーもラガルドも、ナチスによつて自分たちの思想の変りはてた姿を眼にしたならば、嫌悪に思わず顔をそむけたことであろう」(2)といつているが、ラガルドの未来国家へのヴィジョンは決してナチス革命と第三帝

国を期待したものであつたとはいえない。本論において指摘したように、彼は個人の主体性の尊重を唯一絶対のものとみなす個人観を吐露していた。「個人の生活はすべての事柄の上位にある。人格に代るものは私にとつてすべて憎悪に値する」といい、「個人の心情の発展に直接に役立ちえない国家においてはすべてのものが偶像にすぎない」というとき、彼は個人の共同体的存在とその絶対視において、ナチズムの個人観とは相容れないものであつた。このように個人の主体性を強調したラガルドは、政治的デマゴギーや大衆操作のためのプロパガンダを極力忌避した。さらに加えるならば、本論において述べたように、その人種観において彼はナチスの人種理論の先駆者の一員ではなかつた。彼のゲルマン的、ドイツ的精神生活の心情論から発せられた人種論であつて、排外思想をモットーとしたものとは異質なものであつた。これらの観点からラガルドの政治哲学をみるならば、ナチス道徳の系譜学に位置づけることにわれわれは躊躇を覚えるものである。しかし、彼の思想一般とその急進的実践の姿勢とは、ナチスが好個の歴史的遺産として使用し、活用した宿命を担つていたものといえよう。

(1) Hans Kohn, ibid., pp. 270～271.

(2) Jean Neurohr, a.a. O., s. 272.

ノイロールは「著作物としての国家主義はまだ精神的と称せられうる高い平面上を運動することができるが、しかしこの面はすでに危険地帯に密接しており、国家主義的情熱を結晶させ、社会的・政治的戦闘を煽り、同系民族に対する憎悪、国民的自負、軽蔑の感情に点火するからである」とラガルドやシュペングラーの精神活動の所産の影響について注意を促している。